

SZ I 15周年シンポ

曹洞禅インターナショナル(SZ I、福島信悦会長)は6月19日、東京・芝の曹洞宗檀信徒会館で創立15周年記念シンポジウムを開催。海外で活躍する国際布教師らが禅を基盤とした社会活動などを披露した。

開会にあたり福島会長が、社会参加仏教(エンゲージド・ブディズム)を紹介しながら「社会との関わりの中で仏教者ができることはたくさんある。海外寺院や禅センターの方々も実践されており、それを紹介させていただくのがこのシンポである」と趣旨説明。

これを受けて奈良康明・駒澤大学名誉教授が「世界の曹洞禅―禅の果たす社会的役割」と題して基調講演した。ある国際的な宗教会議で、キリスト者が仏教を非社会的な宗教と捉えられていたエピソードを披露。日本仏教の場合、「(寺子屋に代表されるように)社会に関わっているのに、何もやっていないという声があがるのはなぜなのか。檀信徒を含め社会との関係が薄くなってきているのではないか」と指摘。また現代社会との関

3カ国の国際布教師が報告

エンゲージド禅ブディズム

わりから、「異なる宗教との対話」の必要性を力説。そこに禅の果たす役割があるのではないかと提起した。

続くパネルディスカッションには3大陸の3人が登壇。北米ミルウォーキー禅センター主管のオコナー洞燃氏(伝道教師)は刑務所での教誨活動を報告。「収監者数が世界一」100人のうち



南北アメリカとヨーロッパの代表が活動を報告

際布教師、ノルウェー武覚寺)は、キリスト教国での曹洞禅普及の難しさを告白。そのため大学卒業後、パートタイムの高校教員となった。「どこでも教師(教員)というポジションは社会に理解されやすい。ノルウェー政府も私を信用し、国教会の牧師と同等に祭事を司る資格を与えてくれた」。いまでは牧師や神父、イスラームのイマームと共に刑務所内で教誨活動をしていることを報告した。

禅を基盤に社会貢献 教誨や自然保護など

1人が刑務所にいる」という米国社会。98年に受刑者から仏教に関する質問の手紙をもらい、それから文通が始まった。徐々に活動の輪が広がり、当初は刑務所側から受け入れられなかったグループミーティングもできるようになった。坐禅を行い、日本語の四弘誓願を唱和したりする。刑務所職員も参加するなど、評価が高まっている。

オコナー氏は他の社会的な活動にも言及しながら、▽地元でできること、▽親しみをもてる分

野で実践すること、▽長期的な活動となることを忘れないこと―等を活動にあたっての起点とした。

いるが、今回のシンポでエンゲージド・ブディズム(社会参加禅仏教)とも言うべき現象が明らかにされた。

南米からきたビッチ大樹氏(国際布教師、ブラジル禅光寺)は、日本で修行した後に帰国し禅光寺を開創。禅道場にふさわしいようにと植林を行

警察官の研修

の研修に参加しないと州の軍警察になれないほどに。「坐禅はノーアクションだが、止まって何も考えないのではない。行動をするために良いバランスを考えることだ」と話した。

ヨーロッパから参加の草野ラーセン宗禅氏(国

